

特集
ことばの道



草原の道

○カルムイクとオイラト

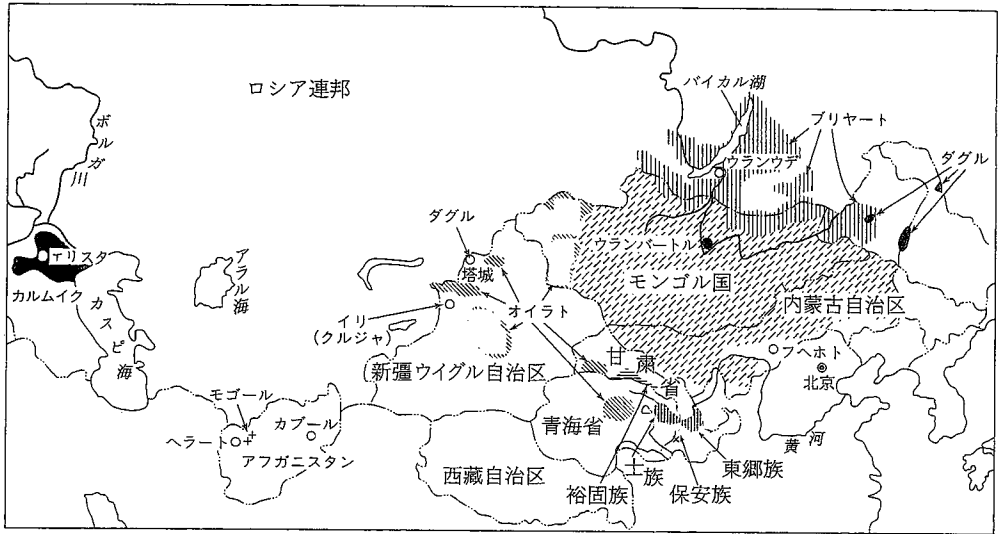
世界最大の湖として知られるカスピ海の北西沿岸、ボルガ川が流入するその右岸にカルムイク共和国はある。ロシア連邦を構成するこの国は、面積七万六千百平方キロメートル。北海道よりひとまわり小さい国土に、三十二万七千人の住民が暮らす。首都「エリスタ」はカルムイク語で「砂のある(土地)」を意味する。共和国の名前に冠せられているカルムイクはモンゴル系民族の名称で、ロシア連邦内に十六万六千人、共和国内には十四万六千人を数える。カルムイク族は伝

十七世紀に現在の新疆ウイグル自治区の辺りからボルガ河畔に移動してきたオイラト族が、カルムイク族の祖先である。モンゴル語族の言語島、カルムイク語誕生の経緯には、中央アジアをまたいで繰り広げられた壮大な歴史のドラマがあった。

栗林 均

統的に仏教を信仰しており、ヨーロッパで唯一の仏教国となっている。

カルムイク族は、オイラトと呼ばれる西部モンゴル族の末裔である。十七世紀の前半、オイラトは天山山脈とアルタイ山脈にはさまれたジュンガル盆地(ジュンガリア)から徐々に勢力を拡大して、強大な部族連合を形成しつつあった。こうしたオイラトの勢力拡張の過程の中で、一六二八年、トルグート部の首長ホー・オルロクに率いられた約五万戸の家族がオイラト内部の紛争を避けて西方に移動を開始し、一六三〇年に遙かボルガ川の流域に至って定住した。オイラト族は



地図1
モンゴル系諸言語（諸民族）分布図

トルグート部、ホシュート部、ドルベト部、ホイト部、ジュンガル部等の部族からなっていたが、ボルガ河畔に移住したのはトルグート部であり、これにホシュート部とドルベト部の一部が加わっていた。移住した地域は現在の共和国が位置するボルガ川右岸の河口にとどまらず、さらに上流の左右両岸にわたる肥沃な土地であった。

「カルムイク」という名称はチュルク系の民族がオイラト族を指した言葉がロシア語に入ったものである。ボルガ流域に移住したオイラト族を、特に「ボルガ・カルムイク」と呼ぶこともあるが、これは歴史的に他のカルムイク（オイラト）と区別しようとしたもの。カルムイク語による民族名の自称はハリマク（Халмак）であり、言語名はハリマク・ケレン（Халмак келин）、さらに共和国の名はハリマク・タンガチ（Халмак Танды）という。タンガチ（Танды）はカルムイク語で「共和国」の意味である。

十七世紀中葉、トルグート部が西に移動した後、天山山脈の北側で徐々に勢力を拡大したのはジュンガル部であった。ジュンガルはモンゴル語で左手、つまり左翼を意味する。オイラト部族連合の中で左翼を担っていたための命名であろう。

が、その名はこの部族が一大勢力となって支配していた天山北路のジュンガル盆地（ジュンガリア）に残っている。ジュンガル部を中心としたオイラトの部族連合は十七世紀の後半から十八世紀の前半にかけて、いわゆる「ジュンガル・カーン国」として発展した。その勢力は、最盛期に東は外モンゴル（現在のモンゴル国）の西半分から、西はカシユガルやタシユケント付近まで、さらに南は東トルキスタンから青海を含むという大遊牧帝国であった。

○トルグートの東帰

カルムイクを含むオイラト族の歴史は十八世紀の後半に一大転機を迎える。

一七五五年、清朝の乾隆帝はオイラトの内紛を機に二万五千のモンゴル・満洲軍からなる遠征軍をジュンガリアに送り、「ジュンガル・カーン国」を滅亡させた。この時の戦いで、清朝軍はオイラト族を徹底的に潰滅させ、その死者は六〇万人にのぼるとも伝えられている。さらに清朝軍がジュンガル部と戦っている間に天然痘が流行して、ジュンガル部はほとんど全滅、ジュンガリアは無人の地と化したという。続

く一七五九年、清朝軍は天山山脈の南部、東トルキスタンを平定し、新しく支配した西域の領土を「新疆」と名付けた。「新疆ウイグル自治区」の名称の由来である。今日、ジュンガル盆地やその周辺に満洲族やダグル族、チャハル等のモンゴル族が居住しているが、その多くは当時のジュンガル遠征でこの地に至り、そのまま定住した部族の子孫である。

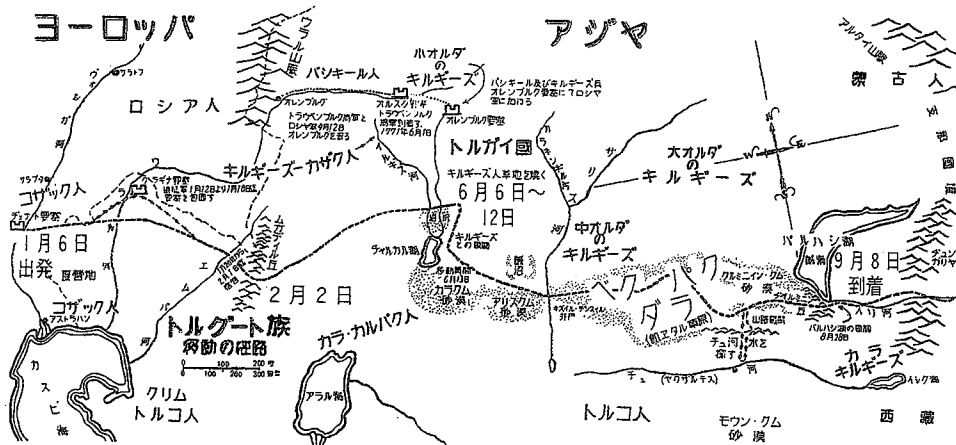
さて、これとほぼ時期を同じくして、十八世紀中頃ボルガ流域ではロシア人やウクライナ人、ドイツ人等の入植が進み、カルムイクは水草の乏しい荒地地へと徐々に追いやられていた。一七六二年に即位したロシアのエカテリーナ二世は、カルムイクの訴えを黙殺して容赦のない徴兵・徴税を繰り返した。この圧制に苦しんでいたカルムイクは、一七七一年大挙してボルガ河畔を離れ、ほぼ空白地帯となっていたジュンガリアをめざして大移動を開始したのである。首長ウバシに率いられた十七万のトルグート族は一七七一年一月にボルガ河畔を出発し、コサツク兵の追撃と戦い、カザフ、キルギス等の異民族に進路を阻まれながら、砂漠や荒地地を越えて四千キロの行程を移動し、故地ジュンガリアのイリ（伊犁）地方に到達したのはその年の九月のことであった。ボル

◆トルグート族の帰還

W. L. Rivers著 *The forgers* (New York, 1939) は「トルグートの東帰」を主題とした小説である。日本ではこの翻訳が『トルグート族』(リヴァー作、辰巳篤夫訳、一九四〇年、生活社刊、第一部・第二部)として出版されている。

翻訳の序文は次のような解説で始まる。
「本書は單なるロマーンではない。」

一七七一年一月トルグート蒙古族はロシア女帝カザリン二世の虐政を逃れんため、五十萬の族民と五百萬頭の家畜を伴つて、ヴォルガ河を棄て、荒涼無人の沙漠を横断すること三千哩、コザック兵や、キルギズ、バシキールの蠻兵の銃火に追はれ、飢渴に苦しみ、酷寒炎暑に喘ぎ斃れつゝ、然も内には王公・喇嘛の確執陰謀から進路を誤られること八ヶ月、命からかくアジアの故地デユンガリヤに、水甘く流清き伊犁河畔、天山の麓に辿り着き、



地図2 トルグート族の帰還経路
(『トルグート族』より)

清朝の乾隆帝に優恤される迄の哀史は知る人も少からう。……作者リヴァーは雄渾な構想と流麗^{リズリク}な筆を以て長篇を成した。まさに一篇の英雄叙事詩である。作者は自分の歴史小説観に従つてこくめに事實を調べ、游牧民族の迷信・風習を究め、織るに若き英雄スプタイと可憐純情のセダル・チャブ姫との切々たる哀戀と悲壯な二人の死とを以てした。架空奔放に流れず、飽くまでレアルな基礎にロマンチックなスタイルを以て描き出されたこの物語は、終始惻々^{ソクソク}と萬人の胸をうつ。讀者をして自ら逃れゆく流離の民の一人として、苦しみ、怖れ、怒り、また喜び、涙含ませるものがある。まことに此は深い運命の書であり、詩である。……」
(ルビは引用者による)

この翻訳は当時、世間に好評を博したようで、その翌年には『追はれて半滅し生きた民族』として再刊されている。

(栗林 均)

ガ川を出発する際には十七万人だったトルグート族が、イリ地方に到着した時にはその半分以上を失って七万人になっていたといわれている。これが史上に名高い「トルグートの東帰」である。

現在、新疆ウイグル自治区の巴音郭楞蒙古自治州、博爾塔拉蒙古自治州、和布克賽爾蒙古自治州等の地区に居住しているオイラト族は、この帰還を成し遂げたトルグート族の後裔である（地図1参照）。

残留組がカルムイクの祖

ところで、一七七一年に大移動を行ったのは、当時ボルガ川の左右両河畔に居住していたカルムイクのうち、左岸のトルグート部だけで、川の右岸つまり西側に居住していたカルムイクは「東帰」に加わらず、その地に残留した。一説によれば、氷結していたボルガ川が出発の当日に氷解して渡ることができなくなったとも伝えられるが、残留したのがはたして自らの意思によったものか、あるいは不可抗力によるものか知る由もない。いずれにせよ、ボルガ川右岸のカルムイクはそこに住み続け、今日のカルムイク族の祖となったのである。

る。

時代は下り、二十世紀になってボルガ右岸のカルムイクも「民族移動」の運命に見舞われることになる。一九一七年のロシア革命の後、カルムイクは一九二〇年にソビエト連邦内の自治区となり、その後三五年には自治共和国となった。間もなく始まった第二次世界大戦のさなか、一九四二年十二月、この地はソ連邦に侵攻してきたドイツ軍に占領されるが、翌年一月にはソ連軍の巻き返しによって奪回される。再びソビエト政権下に入ったカルムイクでは、ドイツ軍占領下でナチスに協力したというかどで、一九四三年自治共和国は廃止、カルムイク族は中央アジアやシベリアに強制移住させられた。

その後一九五七年、ようやく自治区としてのカルムイクの再建が認められ、分散していたカルムイク族も帰還が許された。自治区が自治共和国となったのは翌五八年である。一九九一年のソ連邦崩壊の翌年、カルムイクはロシア連邦内の一共和国としての道を選び、国名はロシア語とカルムイク語を併記したカルムイク・ハリマク・タンガチ共和国 (Kalmıckıy-Halımar Tıghı Pecıyömkı) として今日に至っている。

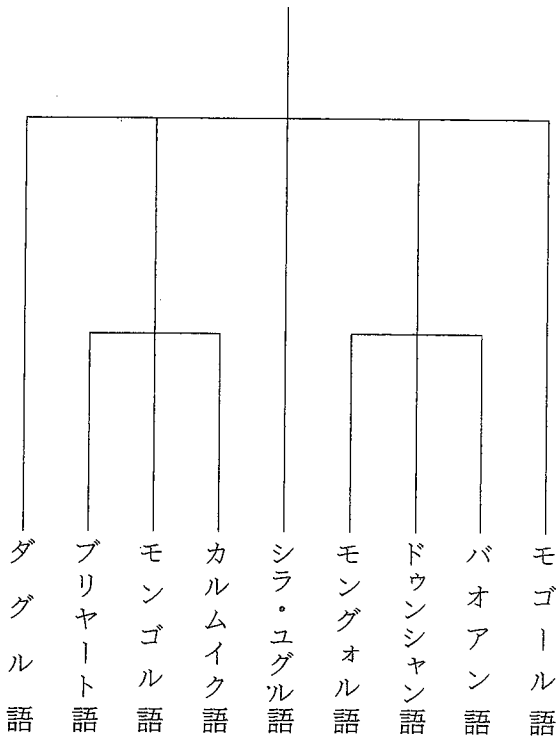
表1 モンゴル語族に属する諸言語

言語名	主な居住地	話者数 (概数)
モンゴル語	モンゴル国・中国 内蒙古自治区等	400万~500万人
ブリヤート語	ブリヤート自治共和 国	30万人
カルムイク語	カルムイク共和国	14万人
ダグル語	中国内蒙古自治区	8万人
ドゥンシャン語	中国甘肅省	20数万人
モンゴオル語	中国青海省	10数万人
バオアン語	中国甘肅省・青海 省	1万人
シラ・ユグル語	中国甘肅省	3千人
モゴール語	アフガニスタン	数百人

●カルムイク語の位置づけ

カルムイク族が使用するカルムイク語は、モンゴル語族に属する。このほか、モンゴル語族に属する言語としてはモンゴル国と中国の内蒙古自治区のモンゴル語、およびロシア連邦のブリヤート自治共和国に行われるブリヤート語が比較的

表2 モンゴル語族の言語系統樹
 (『現代蒙古語』による)



よく知られている。それ以外にも、中国東北地方のダグル(達斡爾)語、甘肅省・青海省に点在するシラ・ユグル(東部裕固)語、ドゥンシャン(東郷)語、モンゴオル(土族)語、バオアン(保安)語等、さらにアフガニスタンのモゴール語もモンゴル語族に属し、これらの言語はすべてひとつの起源にさかのぼる(表1参照)。

モンゴル語族に属する諸言語の中で、カルムイク語はモンゴル語やブリヤート語と共通の言語的特徴を多く有しており、これらと近い関係にあると考えられる。表2は内蒙古大学蒙古語教研室編の『現代蒙古語』（一九四九年）の中でとられている分類であり、カルムイク語、モンゴル語、ブリヤート語が一つの語派をなすとされている。この分類の中で、新疆ウイグル自治区のオイラト族の言語は「モンゴル語」の一方言として扱われている。

すでに見たように、現在のカルムイク族と中国新疆ウイグル自治区のオイラト族とは約二三〇年前にひとつの共同体から分かれ出たもので、それらの言語も極めて近い関係にある。音韻や文法の体系、基本的な語彙といった言語の基幹において、両者はほとんど差異が無く、基本的なコミュニケーションで相互理解も容易である。ただ、政治・経済・文化・社会等の分野における近代的な語彙に関してはカルムイク語がロシア語からの借用語や言い回しを多数取り入れているのに対して、中国のオイラト族は漢語（中国語）および内蒙古自治区のモンゴル語からの借用語を多く用いるため、語彙構成の面ではかなり様相を異にしている。また、カルムイクで

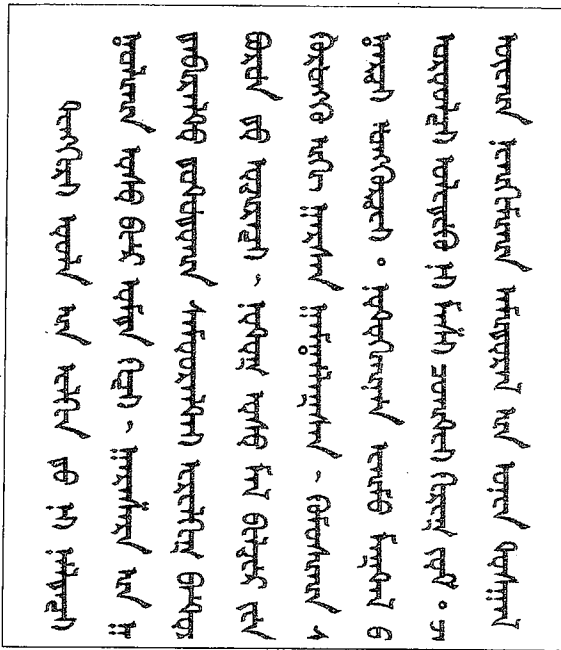
はロシア字を用いてカルムイク語を表記しているのに対して、新疆ウイグル自治区のオイラト族は書き言葉として伝統的な縦書きのオイラト文語を使用している。

なお、カルムイク族は共和国の全人口三二万七千人のうち四五％で第一位を占めている（次はロシア人の三八％）が、その数は全体の半数に及ばない。共和国の言語使用に関してはロシア語が圧倒的に優勢で、実際上の共通語の役割を果たしている。カルムイク語の使用範囲は家庭や同族のコミュニケーション内に限られ、公共の場ではロシア語が使われることが多い。このためカルムイク人のほとんどがロシア語との二言語併用者である。

カルムイクの文字の歴史

モンゴル族は十三世紀の初頭にウイグル文字を借りて自らの言葉を記録するようになった。ウイグル文字でモンゴル語を表記する縦書きの「モンゴル文語」は、以後今世紀に至るまで七百年以上にわたってモンゴル族の共通の書き言葉として用いられてきた。

モンゴル文字は表音文字であるが、一つの文字が二つ以上



文字見本 1
 オイラト文字
 縦書きで行は左から右へ進む

の音を表す場合が少なくないため、表記された単語の読み方が一つに決まらない場合が多い。たとえば、モンゴル文字では t と d が同じ文字であり、語頭以外で a と e が同じ文字であるため、tata, tada, data, dada, tete, tede, dete, dede という音の並びがすべて同じ綴りとなる（モンゴル語には「母音調和」の現象があるので、a と e が混在することはない）。この場合、表記された一つの綴りに八通りの読み方が可能

Күлгүдин хурди хамгиг цуглуулгсн,
 Арслгүдын чиирг хамгиг цуглуулгсн,
 Дөрвн талан
 Дөчн хаани нутг номдан орулсн,
 Үкл уга мөңжин орта,
 Үрглжд хөрн тавн насни дүрэр бөөдг,
 Үвл уга хаврин кевэр,
 Зун уга намрар,
 Даарх кийтн угаһар,
 Халх халун угаһар,
 Сер-сер гисн салькта,
 Бүр-бүр гисн хурта
 Бумбин орн болна.
 Таңсг богдын
 Тавн сай алвтынь
 Тавн сара назрт
 Эрэ багтмар бүүрлгсн бөөдг.
 Өл Маңхи Цаһан ууль
 Назр тенгр хойрин киисн болад,
 Өрүн һарх нарни кел дор
 Маңхаһад бөөдг гинэ.
 Өргн Шаргг гидг далань
 Өрү сөрү хойр урсулта,
 Өнгтө бадмин герл һарад бөөдг гинэ.
 Эзн Жаңһр эврэн бийнь уудг
 Киитн хар Домб һолнь

文字見本 2
 現代カルムイク語
 英雄叙事詩『ジャンガル』より

で、どれが正しいのかは意味によらなければならぬ。上の例では、tata「引け（動詞の命令形）」と tede「それら（遠称指示代名詞の複数主格形）」が実際にあり得る語で、それ以外は実在の単語としては存在しない。さらに tata「引け」か tede「それら」のいずれであるかは文脈で判断するほかない。同様に、モンゴル文字では「k と g」、「o と u」、「ö と ü」がそれぞれ同じ文字であり、結果として二つ以上の

読み方が可能な単語が極めて多く存在している。

オイラト族も十七世紀の中頃までモンゴル文語を書き言葉として使用してきたが、一六四八年、ホシュート部出身の学僧ザヤ・パンディタはモンゴル文語の表記上の曖昧さと、当時すでに口語から乖離していた綴りを解消するために新しい文章語を考案した。彼はモンゴル文字の一部の字形を変えたり、補助符号を加えたりして文字の種類を増やし、また口語を表記しやすい新しい綴りを採用した。この文字は「トド（明瞭な）文字」と呼ばれ、トド文字で綴る新しい書き言葉は以後オイラト族の間に広まり「オイラト文語」と呼ばれるようになった。新しい書き言葉が作られたのは、時あたかもオイラト部族連合の興隆の時代であった。これによって多くの仏教の教典が翻訳され、オイラト独自の文化の存在を誇示することとなった。オイラト文語はジュンガル盆地のみならず、中国の青海地方、モンゴル国の西部、ボルガ河畔等に居住するオイラトによっても使用され、長らく仏教とともにオイラト族の文化的な求心力の役割を果たしていたといえることができる。

オイラト文語は、現在でも中国新疆ウイグル自治区のオイ

ラト族の間では使われているが（文字見本1）、カルムイクでは一九二四年、これに代わってロシア字に基づく書き言葉が採用された。しかし一九二〇年代にソ連邦の諸民族の間で高揚したラテン字（ローマ字）化運動に呼応して一九三一年にはラテン字の正書法に移行し、さらにその運動が方向転換した一九三七年には再びロシア字の正書法に戻るという二転三転の歴史を経ている。現在、カルムイク語はロシア字のすべてに *а, б, в, г, д, е, ж, з, и, й, к, л, м, н, о, п, р, с, т, у, ф, х, ц, ч, ш, щ, э, ю, я* という六個の文字を加えたアルファベツトによって表記されている（文字見本2参照）。

中国新疆ウイグル自治区のオイラト族が伝統的なトド文字を用い、カルムイク共和国でロシア字を使用しているという状況は、ちょうど中国の内蒙古自治区とモンゴル国との関係を思い起こさせる。内蒙古自治区のモンゴル族は現在も伝統的な縦書きのモンゴル文語を使用しているのに対し、モンゴル国では第二次世界大戦の直後にこれを廃して、ロシア字に基づく正書法を採用して今日に至っている。

（くりばやしひとし／言語学）